



—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

レバノン：ベイルートで爆弾テロ

10月19日、レバノンのベイルート中心部で、車による爆弾テロが発生した。現場はキリスト教徒が多いアシュラフィーナ地区。同爆発で、治安当局諜報部門トップのウィサム・ハサン准将を含む8人が死亡した。その後の警察の捜査では、爆発を積んだ車は約1年前に盗まれた車で、爆発現場に駐車させてあり、遠隔操作で爆破された。爆弾テロの標的はハサン准将だったと見られる。同准将は、アサド政権やヒズブッラーの関与が疑われているラフィク・ハリリー元首相暗殺事件の捜査を担当しており、今年8月、アサド政権に近いサマハ元情報相がテロ計画に関与した疑いで逮捕された事件の捜査も指揮していたことから、シリアやヒズブッラーに疑いの目が向けられた。報道では、ハサン准将は、偽名の旅券で欧州を訪問し、事件の前日帰国した。同准将は、普通の車で移動していたとされる。

20日、レバノンのミーカーティー首相は、ハサン准将殺害について、シリアによるレバノンの不安定化を捜査していたことと関連があるとの見方を表明した。同事件に怒ったレバノン人らが、一部道路を封鎖してタイヤを燃やすなどの抗議行動を行った。また暗殺事件にシリアのアサド政権が関与していると主張するスンニー派などの野党支持者らが、ミーカーティー内閣退陣を求めるデモを行い、治安部隊と衝突。北部トリポリでも21日から22日にかけて、親アサド派と反アサド派の抗争とみられる銃撃戦で4人が死亡した。21日、ハサン准将の葬儀が、ベイルートの中心部の殉教者広場で行われた。スレイマーン大統領が弔辞を読んだ。同広場には約1万人の市民が集まり、レバノン国旗を振って「アサドは去れ」などと連呼、情報機関トップの葬儀は「反シリア」の集会となった。

米国のクリントン国務長官は、20日、ミーカーティー首相と電話会談し、爆弾テロの捜査に協力することで合意した。22日、レバノン警察幹部はFBIが事件の捜査に協力していることを明らかにした。治安安定のため、レバノン国軍が各地に配置された。23日のAP通信は、レバノンの情勢は落ち着きを取り戻していると報道した。

評価

レバノンで今回のような爆弾事件が起きると決まってシリアが疑われる。ハサン准将が捜査していた事件が暗殺に関係すると仮定すれば、こうした疑いは自然であるが、そのことで

シリアの犯行と決めつけるには材料が不十分である。ハサン准将は、資金洗浄などの犯罪の捜査にも関わっていたとされ、犯罪組織の犯行の可能性もある。ハリーリー首相暗殺事件の捜査や裁判では、事件を政治的に処理する動きが強く出た。今回の犯行が誰であれ、捜査に強い政治的色合いが出るかどうかは見極める必要がある。

レバノンの政治家たちは、シリアが不安定化する前から、反シリアか親シリアかで政治的な色分けをされてきた。レバノンには、シリア内の混乱の波紋を強く受けている。ヒズブッラーは、イランと共にバッシャール・アサド大統領を支持する立場を表明している。北部トリポリでは親シリアと反シリアの立場を取るレバノンの武装勢力間の戦闘が散発的に発生している。シリア・レバノン国境では、シリア軍・反体制派勢力とレバノン治安部隊の衝突が時たま発生している。それでもレバノンは、現在まで一定の安定を維持してきた。シリア内政が混乱する場合、レバノンの秩序も崩壊するとの見方もある。今回の爆弾テロの実行犯の追及は重要な問題だが、今回の事件がレバノンの安定にどう作用するかはさらに大きな問題になるだろう。

(中島主席研究員)